

フランス語の不定名詞句主語

森 香 奈 絵・東 郷 雄 二

京都大学大学院 人間・環境学研究科 人間・環境学専攻
 京都大学 人間・環境学研究科 共生人間学専攻
 〒606-8501 京都市左京区吉田二本松町

要旨 フランス語の *un N* (単数不定名詞句) と *des N/du N* (複数不定名詞句/ 非可算不定名詞句) は、共に主語位置での分布に強い制約があり、時間・空間定位力のある述語としか共起しない。ただ、総称文の主語位置では対照的な振り舞いをし、*un N* のみが総称文主語になれ、*des N/du N* はなれない。この両者の主語位置での分布制約はそれぞれの表す意味とどのように関わっているのか。この疑問に答えるため、まず両者の共通点として、選言的集合を表すことに着目する。不定名詞句は、「一つの *N* である個体・集合」なら潜在的に全てを指せ、指示対象は特定されていず不定である。しかし、これだけでは、何故 *des N/du N* が総称文の主語として容認されないのか説明できない。総称文では、導入される指示対象は非特定のであり、これは不定名詞句の持つ指示対象の不定性と矛盾しないからである。そこで次に両者の相違点に注目すると、*un N* は個体数が 1 と決まった集合を表すのに対し、*des N/du N* は集合内部の構造のない数量の不定な集合を表すことがわかる。主語位置には、数量の定まった名詞句が要求されることから、*des N/du N* が主語に立つためには、述語による「集合の区切り取り」が行われねばならない。しかし、総称文に用いられる述語に集合を区切り取る力はない。よって、数量が定まっている *un N* のみが総称文の主語になれ、数量の不定な集合を導入する *des N/du N* は容認されないことを主張する。

1. はじめに

フランス語の不定名詞句には、可算単数名詞句 *un N* (女性形 *une N*) と、可算複数名詞句 *des N*、それに非可算名詞句 *du N* (女性形 *de la N*) がある。これら不定名詞句は、主語位置での分布に厳しい制約があり、一時的な出来事や状態を表す述語としか共起しないことが指摘されている

(Kleiber 1981, 2001, Bosveld-de Smet 1997, 2000, Dobrovie-Sorin 1997 etc.).

- (1) a. Un avion s'est écrasé.
 b.*Un étudiant est intelligent.
- (2) a. Des inconnus ont cambriolé la maison de Léa. (Kleiber 2001)
 b.*Des inconnus sont intelligents.
- (3) a. Du beurre était en train de fondre dans la pièce. (Dobrovie-Sorin 1997)

b. *Du beurre était savoureux. (Dobrovie-Sorin 1997)

このように不定名詞句は、恒常的な状態や属性を表す述語とは組み合わせられない。しかし、*un N* だけはこれに加え、一部の性質を表す述語とも共起し、総称文を形成する。

- (4) a. Un carré a quatre côtés.
 b. *Des carrés ont quatre côtés.
 c. *De la glace fond à 0_ (Bosveld-de Smet 2000)

un N と *des N/du N* の主語位置における分布の共通点と相違点は、両不定名詞句の表す意味とどのように関わっているのだろうか。また、何故 *un N* は、一時的な出来事や状態を表す述語と組み合わせられていないにも関わらず、総称文主語になれる

のか。この二つの疑問に答えるために、以下では二つの点に着目し議論を進める。まず一つは、*un N*, *des N/du N* ともに、選言的集合を表すという点である。不定名詞句は、「一つの *N* である個体・集合」なら潜在的に全てを指せるという意味で、指示対象は特定されていず不定である。この *un N* と *des N/du N* の共通点が、(1)– (3)の分布の共通性と結びついていると思われる。二つ目の点は、*un N* と *des N/du N* の違いは、*un N* は個体数が 1 と定まった個体を表すのに対し、*des N/du N* は、数量の定まらない均質な集合を表す点である。この点が、総称文における両者の分布の違いの原因であることを示したい。

2. 不定名詞句主語と述語の組み合わせ

2.1. 述語の分類

不定名詞句の主語位置での分布は、述語の性質に大きく依存していることが知られている。以下で詳しく見るが、*des N /du N* は一時的な出来事や状態を表す述語とのみ共起し、*un N* はそれに加え、一部の性質を表す述語とも共起し総称文を形成する。

述語の分類として、Carlson (1977)の局面レベル述語・個体レベル述語の区別がよく知られている。局面レベル述語は一時的状態や出来事を表す述語で、一般的な属性や性質を表す述語が個体レベル述語である。両者の区別は、述語の表す事態が時間軸上に位置づけられるか否かによる。よって、「状態(stative)」対「非状態(non-stative)」では捉えられなかった不定名詞句主語の分布もうまく扱える。

(5) *Dans le coin, un homme était assis.*

(状態述語, 局面レベル述語)

(6) **Des singes sont intelligents.*

(状態述語, 個体レベル述語)

状態述語でも、時間軸上への定位があれば、不定名詞句は主語として立てるのである。

しかし、Carlson の局面・個体レベル述語の対立でも、不定名詞句の分布を説明するには十分

でないことが Dobrovie-Sorin (1997), Bosveld-de Smet (1997, 2000), Kleiber (2001)等で指摘されている。いずれの研究でも、最も重要な述語の分類基準は、空間への定位であるとされている。Carlson の述語の分類では、時間軸上への定位の有無が決定的な役割を果たす。しかし、空間軸上への定位を行わない局面レベル述語と組み合わせられた場合、不定名詞句の主語位置での容認度は低い。

(7) **Des enfants sont en colère/ont faim/sourient.*

(Bosveld-de Smet 1997)

être malade, en colère 等の述語は、一時的状態を表しており時間的定位を行うので局面レベル述語である。しかし *des N* 主語の容認度は低い。何故なら、これらの述語は時間的定位は行っていないからである。この空間軸上への定位の有無を分別基準とした述語の分類に、Kleiber (1981)の特定化・非特定化述語(*prédicat spécifiant/ non spécifiant*)等がある。この種の分類が、不定名詞句の主語位置での分布を捉える上で有効に働くかどうかは、次節で検討する。

以上の述語の分類を、Bosveld-de Smet (1997, 2000)がうまく整理している。

(8)

Kleiber	Specifying		Non-specifying	
Carlson	Stage-level		Individual-level	
Verkuyl	Nonstative	Stative		
Categories	A	B	C	D

A には、*arriver, courir* 等動作や出来事を表す述語が入る。B は、状態ではあるが時間・空間軸上への定位のある *être posé sur la table, dormir* 等があてはまる。C は、時間的定位はあっても空間的定位のない述語 *être étonné, être frais* である。D には、時間的定位も空間的定位もない *être intelligent, carnivore* 等個体レベル述語¹⁾が入る。以下では、Bosveld-de Smet の範疇名に従い、A, B, C, D の呼び名で述語を分類することとする。

2.2 不定名詞句と述語の組み合わせの考察

ここでは、前節で概観した述語の分類に基づき、

un N, des N/du N 主語と組み合わせが可能な述語を一つ一つ観察し確認しておきたい。まず、フランス語の不定名詞句は、un N にせよ des N/du N にせよ、A タイプの述語文では主語位置に立つことができる。

- (9) Un avion s'est écrasé hier dans les Vosges. (Kleiber 2001)
 (10) Des inconnus ont cambriolé la maison de Léa. (Kleiber 2001)
 (11) De l'eau dégoulinait sur le plancher. (Dobrovie-Sorin 1997)

次に B タイプの述語との組み合わせを考える。このタイプの述語も A タイプの場合と同じく、un N, des N/ du N の主語位置での分布を許す。

- (12) Dans le coin, un homme était assis. (Bosveld-de Smet 1997)
 (13) Des nénuphars s'étaient à la surface de l'étang. (Bosveld-de Smet 2000)
 (14) Du givre hérissait le pourtour de sa bouche. (Kleiber 2001)

C 述語は、時間軸上への定位はあるが、空間的定位のない述語である。このタイプの述語は、基本的には un N 主語も des N/ du N 主語も容認しない²⁾。

- (15) ?*Dans le coin un homme était malade. (Dobrovie-Sorin 1997)
 (16) *Des enfants sont en colère/ont faim/sourient. (Bosveld-de Smet 1997)
 (17) *Du beurre était frais/liquide/mou. (Dobrovie-Sorin 1997)

最後にタイプ D の述語であるが、このタイプの述語は、時間軸上への定位も、空間軸上への定位も行わない述語であり、不定名詞句主語との組み合わせは容認されない。

- (18) ?*Un élève était intelligent.
 (19) ??Des élèves étaient intelligents. (Dobrovie-Sorin

1997)

- (20) *De l'or est jaune. (Bosveld-de Smet 2000)

ただし、un N のみ、一部の D タイプ述語と組み合わせられ、総称文を作ることができる。

- (21) a. Un carré a quatre côtés.
 b. *Des carrés ont quatre côtés.
 c. *De la glace fond à 0_. (Bosveld-de Smet 2000)

詳細は後に述べることとし、ここではとりあえず、D タイプ述語との組み合わせでは、不定名詞句は組み合わせられないと、一様に考えておく。

以上から、A, B との組み合わせでは、un N, des N/ du N 共に主語として容認されるが、C, D との組み合わせでは容認されないということがわかる。un N が総称文で主語として容認されることを除けば、不定名詞句が主語位置に立てるのは、時間・空間両軸上への定位力のある述語と組み合わせられた時のみであるという Kleiber 等の主張は、適切であることが認められる。次節では、不定名詞句の主語位置での分布の共通点と相違点につながる両不定名詞句の表す意味の共通点と相違点を明らかにする試みを展開する。

3. 不定名詞句の指示対象

3.1. un N と des/du N の共通点

Un N の表すものについて、東郷 (2001, 2002) は、「N ひとつ」と述べている。これを言いかえれば、un N は「N ひとつ」であるものならその全てを潜在的指示対象とするということになる。des N/ du N にもあてはめると、un N や des N/ du N は、それぞれ「N である一つの個体」「N である一つの集合」を満たすものであれば、何でも潜在的な指示対象として指すことができるといえる。例えば un chien なら、一匹の犬であるもの a_1, a_2, a_3, \dots の内のどれかをどれでも表すことになる。des chiens ならば、犬の集合 A_1, A_2, A_3, \dots の内のどれでも表す。不定名詞句は、それ自身では、このような選言的集合を表すと考えられる。このことを、

un N, des/du N の共通点として、次のような仮説を提案する。

- (22) 仮説 1 : 不定名詞句 un N, des/du N は、ともに選言的集合を表す。

3.2. un N と des/du N の相違点

前節では、un N と des/du N の共通点を見たが、導入するものの数量が定まっているか否かという点で、両者は大きく異なっている。Un N で導入されるものは、指示の点では不定であるが、数の点では不定ではない。Un N が用いられれば個体の数は 1 である。それに対して、des N や du N はその数や量も不定である。このような両者の違いを反映した des N/ du N の類似性や un N との対立は、これまで数多く指摘されている通りである。

- (23) [量化詞+可算複数名詞・非可算名詞] (Galmiche 1986, Bosveld-de Smet 2001)
- Beaucoup {d'enfants/ de neige}
 - Une grande quantité {d'enfants/ de neige}
- (24) [互換性] (Galmiche 1986, Bosveld-de Smet 2001)
- acheter {de la pharmacie/ des médicaments}
 - écouter {de la variété/ des variétés}
- (25) [焦点は量化詞] (Bosveld-de Smet 2000)
- Je n'ai pas consulté {quelques/ *des} grammaires seulement, je les ai toutes consultées.
 - Il n'a pas bu {beaucoup de/ *de la} bière, il n'en a bu qu'un verre.
- (26) [不定代名詞 en との照応] (Galmiche 1986, Bosveld-de Smet 2000)
- Des fautes, il en, fait à la douzaine.
 - {*Trois/* Une masse de} fautes, il en, a fait à la douzaine.
 - Du lait, il n'en, boit pas.
- (27) [無標性] (Galmiche 1986, Corblin 1989)
- Vous avez des enfants? – Oui, un.
 - Vous avez un enfant? – Oui, {? plusieurs/ ? deux}.

- (28) [非可算名詞を主語にとる述語との共起] (Bosveld-de Smet 2000, 2001)

- Il a entassé {*un/des} livre(s) sur son bureau.
- Il entassait de la moutarde et de la charcuterie sur un bout de pain.

さらによく観察すると、des/du N と un N の違いは、単なる数量の(不)定性にとどまらないことがわかる。Un N は一つの「個体」を表すが、des N/du N は共に、一つ一つ個体化された成員からなる集合を表すのではなく、均質なものの集まりを表す。この特性は、部分冠詞が用いられる du N の性質としてよく指摘されることだが、同時に des N にも共有されている。次の例は、des N の指示対象が、個体化されていないものであることをよく示している(Anscombre 2001)。

- (29) *Pris séparément, (les/ certains/ ??des) étudiants reconnaissent avoir parfois triché.*
- (30) *Max regarde (les/ certaines/ ??des) émissions de télévision l'une après l'autre.*

pris séparément, l'une après l'autre は、導入される集合の成員が個別に取り出せるようなものでなければ用いることができない。des N がこれらの修飾語句と共起できないことは、まさに des N が個体単位に分解できない均質な集合を導入することを示している。des N は、一つ一つ区別できるような個体成員からなる集合は導入しないのである。

集合の均質性は、集合の累加性(cumulativité)⁹⁾を含意する。Bosveld-de Smet(2001)は、次の例によって、des N/ du N の指示対象が累加的であることを示している。

- (31) *Si on ajoute du sable à du sable, on a encore du sable.*
- (32) *Si on ajoute des pommes à des pommes, on a encore des pommes.*
- (33) **Si on ajoute une pomme à une pomme, on a encore une pomme.*

また、累加的なものを動詞の目的語位置に置くと、動詞のアスペクトが継続相になるという現象が知られているが(Verkuyt 1972)、これは *des N/ du N* でも成り立つ。

- (34) a. Jean a bu {un, trois} verre(s) de bière
(*pendant des heures). (非継続相)

c. Jean a bu de la bière pendant des heures.

(継続相)

- (35) a. Jean a mangé {une, trois} pomme(s) (*pendant des heures). (非継続相)

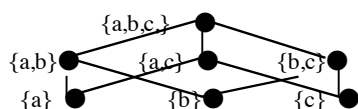
b. Jean a mangé des pommes pendant des

heures. (継続相)

{un, trois} N では数量が既に定まっており、文全体は非継続相を表すが、*des N/ du N* の場合には、数量が定まっておらず、累加的であるので、文全体は継続相を表している。

des N/ du N が共有するこのような「均質性」は、導入する集合内部の構造の欠如として捉えられる。ここでいう集合内部の構造とは、次のような構造を指す。

- (36) 集合内部の構造



このような内部構造を持つ {a, b, c} の集合は、任意の個体を含む任意の部分集合 {a, b}, {a, c}, {b, c}, {a}, {b}, {c} に分解できる。しかし、この構造を持たない *des N* や *du N* の表す集合は、このように個体化された成員を持たない。内部構造を持つ集合は、その成員一つ一つを取り出すこともできるが、内部構造を持たない集合は、いわばもやもやとした集合体でしかなく、その輪郭も定かではないようなものである。よって当然、下位集合や個体要素を構成部分として分解し、別々に取り出すことはできない。これが、*des/du N* の特徴であり、一つの個体を表す *un N* との違いである。これを、仮説として次のように提案する。

- (37) 仮説 2 : *un N* と *des/du N* との違いは、*un N* は個体数が 1 と定まった個体を表すのに対し、*des/du N* は、集合内部の構造を持たない、数量の不定な集合を表す点である。

4. 不定名詞句の主語位置での制約

4.1 主語位置分布制約 I : *un N, des/du N* の共通点

3 節での仮説により、2 節で見た主語位置での分布が正しく予測できる。まず、*un N, des/du N* は共に、時間・空間両軸上への定位力のある A, B タイプの述語となら組み合わせられるが、それ以外の C, D タイプの述語とは組み合わせられないという共通点があった。これは、仮説 1 で示した「選言的集合を表す」という不定名詞句の表す意味に関わっている。

不定名詞句には、まだ談話に登場していない指示対象(discourse referent)を新しく談話に導入する働きがある。指示対象がいったん談話に導入されると、それは代名詞などの照応表現によって、適切に照応されるものになる。

- (38) {Une fille est / Des filles sont } venue(s) me voir. Elle(s) a (ont) apporté une bonne nouvelle.

このような文脈では、照応代名詞の指示対象は、一つの特定の個体なり集合である。よって、不定名詞句が代名詞等によって適切に照応される指示対象を導入するためには、名詞句自体によって、あるいは文全体によって、一つの特定の個体・集合が導入されなければならないことになる。ところが、不定名詞句自体は選言的集合しか表さないため、それ自身では、代名詞照応が可能な指示対象を談話に導入することはできない⁴⁾。そのため、文全体の意味内容によって個体・集合の特定・選出が行われることが必要となる。この特定の指示対象の選出作業は、述語に要求されることになる。不定名詞句の表す複数の指示対象候補の中から一つを特定するためには、述語は時間と空間の指定を受けた出来事・一時的状態を表している必要が

ある。何故なら、時間や空間の指定があれば必然的に集合は一つに絞られるが、逆に時間・空間の指定がなければ、集合を一つに特定することはできないからである。このことが、不定名詞句主語を許容する述語とそうでない述語を分ける決め手となっていると考えられる。un N や des N/ du N 主語を容認する述語は A, B であったが、このタイプの述語は、述語の表す事態を時空間軸上へ定位する力がある。それに対して、C, D タイプの述語には空間定位力がない。これらの述語は空間定位のない状態や属性を個体に付与するだけなので、個体を一つに特定することはできない。しかし、A, B 述語は、時空間定位により、不定名詞句主語の表す潜在的指示対象を特定し、選言的集合から一つの要素を選び出せるのである。

以上から次のような仮説を立てることができる。

- (39) 仮説 3 : 不定名詞句の表す選言的集合の中から一つの要素を特定・選出するためには、組み合わせられる述語は、時空間定位力のあ
る述語 A, B でなければならない。

これを表にまとめると次のようになる。

- (40) 個体・集合の特定・選定の必要性の充足

	必要性	述語による充足	必要性の充足
A, B,	有	有	-
C, D	有	無	-

4.2. 主語位置分布制約 II : un N, des/du N の相違点

前節で、un N, des/du N の共通点として、両者共に選言的集合を表すため、時間・空間定位力のある述語を要求することを見た。しかし、un N のみ、時空間軸上への定位力のない述語であるにもかかわらず、一部の D タイプ述語と組み合わせられ主語に立てる。一見 un N の方が例外的な振る舞いをしているように見えるが、un N の出現する文脈を考えると、実は仮説 1 で説明のつかない振る舞いをするのは des/du N の方であることがわかる。

Un N は、時空間定位力のない D タイプ述語の

主語に立てるが、それはある種の述語に限られている。すなわち、un N との組み合わせにより総称解釈を生み出せる述語である。タイプ D の述語は、Kleiber, Carlson, Verkuyl 三者共に一致して、一般的な類として捉えられている。しかし、このタイプの述語は、さらに二つに分類することができる。一つは、主語名詞句との組み合わせにより総称解釈を生み出せるもので、もう一つは総称解釈を生み出せないものである。総称解釈を導けない述語を D1、導ける述語を D2 と呼ぶことにする。Un N と des/du N とで、主語位置での分布に違いが出るのは、この D2 述語との組み合わせにおいてなのである。

- (41) [D1 述語]

- a. ?*Un élève était intelligent
b. ??Des élèves étaient intelligents. (Dobrovie-Sorin 1997)
c. *De l'or est jaune. (Bosveld-de Smet 2000)

- (42) [D2 述語]

- a. Un cheval est un animal utile.
b. Un carré a quatre côtés.
c. *Des chevaux sont des animaux utiles.
d. *Des carrés ont quatre côtés.
e. *De la glace fond à 0_. (Bosveld-de Smet 2000)
f. *De l'eau est liquide.

(41)では、不定名詞句が D1 述語と組み合わせられた場合であるが、この場合は、un N も des/du N も総称解釈はできず、主語位置に立つことは出来ない。しかし、(42)では、un において総称解釈が成り立ち、主語として容認される(a-b)。それに対し des/du N は、un N と同タイプの述語と組み合わせても、総称解釈を持たず、主語としても容認されない(c-f)⁵⁾。

ここで、総称文脈を与えられる述語 D2 とはどのようなものなのかはつきりさせる必要があるだろう。東郷(2001, 2002)は、un N 総称文で容認度が高い述語と低い述語を比較し、un N 総称を許す述語は、本質的特徴や定義、必要条件、規範的意味の述語など、人によって判断が揺れたり、状況に左右されたりしない内容を表す述語だと述べて

いる。それに対して、*un N* 総称の容認度が低いのは、偶有的特性を表す述語であるという。二つの述語の違いについて、東郷は、述語が成り立つための適切性条件の内容量がゼロに近ければ近いほど、本質的特徴や定義等を表す述語であり、その内容量が多くなればなるほど、偶有的特性を表すと説明している。具体的には、例えば *Un carré a quatre côtés* は、いつでもどこでも成立するので、この命題が成り立つための適切性条件はゼロと考えてよい。それに対して、*?Un vélo est utile* はいついかなる状況でも成り立つわけではなく、天候や交通状態、地形など様々な要因が全て揃わなければならない。これが適切性条件であり、この場合は先の例と比べてその内容量は明らかに多い。これが *D1* と *D2* の違いである。

D2 と組み合わせられ、総称文脈が作られると、指示対象の特定は不要であるばかりか矛盾となる。総称文では、全てのものについて成り立つ属性が述べられるのであるから、文が特定の個体を指示対象として導入することは矛盾となる。従って、時空間定位による個体の特定・選出は不要となり、不定名詞句の表す選言的集合はそのまま、総称文脈に受け入れられることになる。よって、*un N* が *D2* 述語と共に主語に立てるのは、仮説1と何ら矛盾するものではないのである。

では、何故、*des/du N* は、指示対象を特定するという条件が解かれた総称文でも、主語になることができないのだろうか。これには仮説2が深く関わっている。*un N* の表す集合は、個体数が1と決まっている。しかし、*des N/ du N* の表す集合は、数量が不定で、集合内部の構造がなく均質である。*un N* の導入する集合の輪郭は「一つの個体」と数量がはっきり定まっているが、*des N/ du N* の導入する集合には、定まった輪郭がないのである。しかし、通常主語位置に現れる名詞句の表す集合は、はっきりと数量の定まっている/定められるものでなければならない⁹⁾。よって数量の不定な集合しか表さない *des N/ du N* が主語位置に立てるためには、述語による集合の区切り取りが必要となる。

まず、*A, B* タイプの述語には文の述べる事態を特定の場所と時間に結びつける働きがあるので、*des N/ du N* の表す集合は一つに特定されると同時

に、輪郭も明確に与えられる。

(43) *Des inconnus ont cambriolé la maison de Léa.*

[A 述語]

(44) *De l'encre s'étalait sur le sol.*

[B 述語]

des inconnus, de l'encre だけでは、輪郭がはっきりしない集合を表しているにすぎないが、時空間定位力のある述語によって、その集合は輪郭を与えられ区切り取られている。「レアの家に盗みに入った見知らぬ人間」の集合は、膨らんだり縮んだり伸縮自在の輪郭の曖昧な集合ではなくなる。時空間定位によって特定されるからである。(44)も同様で、述語により集合は特定され、同時に区切り取られる。以上より次の仮説が導かれる。

(45) 仮説4：通常、主語名詞句は、その指示対象の数量が決定している/されることが要求される。集合内部の構造を持たず、数量も定まらない集合を表す *des N/ du N* が、*A, B* 述語文の主語になれるのは、これらの述語が時空間定位することにより、集合を区切り取る力を持ち、集合の数量を定めることができるからである。

これに対して、*D2* 述語も含めた *C, D* 述語には集合を区切り取る力はない。時空間定位の力を持たないからである。特に、主題- 題述構造に用いられることから明らかなように、*D* 述語は既に個体あるいは集合の規模が確立しているものに対して属性を付与する述語である。数量の定まらない集合について、ある属性が成り立つことを述べるような文には、真理条件を与えられない。属性を付与する集合の大きさが決まっていなければ、その集合に属性を付与することが、真となるのか偽となるのか判断できないからである。よって、集合内部の構造を持たない、数量の不定な集合を表す *des N/ du N* は、集合の規模の確立を前提とする述語 *D2* (を含めた *D* 述語) と組み合わせることはできない。

- (46) 仮説5：D2 述語には集合を区切り取る力がないので、数量の定まらない集合を表す *des N/ du N* は、その主語位置に立つことはできない。

「集合の区切り取り」の必要性の充足について、まとめたものが次の表である。

- (47) 集合の区切り取りの必要性の充足

述語	必要性	述語による充足	主語名詞句による充足		必要性の充足	
			UnN	dsduN	UnN	dsduN
A, B	有	有	有	無	○	○
C, D1	有	無	有	無	○	×
D2	有	無	有	無	○	×

そして最終的に、*un N*, *des N/ du N* それぞれの名詞句主語の容認度は、(40), 0の「必要性の充足」の欄の_と対応する。「個体・集合の特定・選定の必要性」と「区切り取りの必要性」の両方が満たされれば、文は容認される。

- (48) [*un N* の場合]

	個体の特定の必要性の充足	集合の区切り取りの必要性の充足	文の容認度
A, B	○	○	○
C, D1	×	○	×
D2	○ ⁷⁾	○	○

- (49) [*des N/ du N* の場合]

	集合の特定の必要性の充足	集合の区切り取りの必要性の充足	文の容認度
A, B	○	○	○
C, D1	×	×	×
D2	○	×	×

D2 タイプの述語が用いられる総称文の主語位置における *un N* と *des N/ du N* の分布の違いは、最終的には、両者の表す集合の数量の定・不定の

違いによって捉えられることがわかる。*un N* は個体数が1とはっきりと定まった個体変数を導入するのに対して、*des N/ du N* は、集合内部の構造を持たない、数量の不定な集合変数を導入する。一方、D2 述語文が主語として要求するのは、数量が定まった集合である。しかし、D2 は時空間定位をせず、述語に名詞句の表す集合を区切りだす力はない。従って、個体数が1と定まっている *un N* はD2の主語になれるが、それ自体で閉じた集合を導入できない *des N/ du N* はD2の主語になることはできないのである。

des/du N が総称文で主語になれないのが、指示対象の集合の数量が未決定だからだとすると、集合の数量が定まっていれば、総称文主語に立てるといふ含意が導かれる。この予測は実際正しいと思われる。

- (50) Deux arbres ne font pas une forêt.
(Corblin1989)
- (51) Cent soldats forment une centurie. (Carlier 2001)
- (52) Deux ouvriers font plus qu'un seul pour ce travail. (Bosveld-de Smet 1994)
- (53) Trois piqûres d'abeille tuent un homme.
(Corblin1987)
- (54) Deux noirs valent une blanche. (Corblin1987)

上の例文は全て、数量名詞句を主語に持つ総称文である。*Un N* のように、数が1の場合だけでなく、他の数量であっても、集合の数量が定まっていれば、主語に立てるのである。

4.3 集合の「特定」と「区切り取り」

仮説1と2から導かれる「個体・集合の特定・選定の必要性」と「区切り取りの必要性」は、共に述語の時間・空間定位力によって充足されるが、両者は同一ではない。「個体・集合の特定・選定の必要性」という前者の要請は、指示対象を導入するという不定名詞句の談話内での役割から生じるもので、後者の「区切り取りの必要性」は名詞句レベルにおいて述語の要請により生じるものである。ただし、総称文脈では、個体・集合の特定は不要であるため、前者の要請は解除される。し

かし、後者の要請は総称文であろうとなかろうと解除されない。数量の定まった指示対象を表す名詞句を主語位置に要求するのは、どの述語でも同様だからである。また、集合の「特定」と「区切り取り」の違いは、前者が照応可能な特定の指示対象を選出するのに対し、後者は、述語の成り立つ集合の規模を決定するという点である。des/du N に関して言えば、集合特定の必要性を満たすためには、まず、集合の区切り取りが行われなければならないことになる。集合の規模が決定されない限り、集合内部の構造もなく輪郭もない集合を特定し選出することは不可能だからである。

5. おわりに

本稿では、フランス語の不定名詞句 un N, des/du N の主語位置での分布制約が、それぞれの名詞句の表すものとどう結びついているのかを明らかにすることを試みてきた。特に、総称文主語に現われる un N と現われない des/du N の違いまで含めた統合的な観点で、両不定名詞句の振る舞いを分析した点が、本稿の特徴である。今後は、他の統語的位置における不定名詞句の振る舞いや、他の名詞句との比較を重ねていく必要がある。

注

- 1) construire, courir 等本来的な局面レベル述語(A-C タイプの述語)が、習慣・総称解釈された場合は、何らかの意味操作により(ex. Carlson 1977 では、Gn 演算子)、結局、個体レベル述語として扱われるので、ここでは一括し個体レベル述語(D タイプ述語)に分類されると考える。
- 2) C 述語の中には、場所を表す副詞語句を付加すると不定名詞句を主語に許容するようになるものもある。
 - (1) a. *Du linge séchait. (Bosveld-de Smet 1997)
b. Du linge séchait dans la salle de bain. (Ibid.)
 - (2) a. *Des pas sont visibles. (Ibid.)
b. Des pas sont visibles sur la neige. (Ibid.)
 紙幅の都合上詳しくは述べられないが、このタイプのC 述語は、場所を表す副詞句の付加によって、述語の項構造が、場所変数を必要とするものに変容させられると考えられる。
- 3) ある属性 P を持つ部分からなるあらゆる集合にも P が成り立つ時、属性 P は累加的であるという。
- 4) (1) *Un bébé, il est intéressant. (東郷 1995)
(2) *Un bébé, il ne m'intéresse pas. (Ibid.)

ただし、総称文脈では代名詞照応が可能である(ex. Un enfant, il aime les bonbons :Anscombe 2001)。詳しくは紙幅の関係で述べられないが、重要なことは、総称文脈における代名詞照応も、不定名詞句の力のみで可能なのではなく、総称という文脈が必要だということである。

- 5) サブクラス読みされる場合を除く。サブクラス読みとは、種全体に対して、その一部の低位種について述べる文に与えられる解釈である。
- 6) 未完了相に置かれた非対格自動詞と用いられた場合、その主語名詞句の表す集合は、数量が不定で輪郭が定まらないものであっても許容される(ex. De la fumée s'élevait du four., cf. incremental theme in Dowty 1991)。紙幅の関係でこれ以上論じられないが、この場合、述語は、主語名詞句の指示対象の数量が定まっていることを要求しないので、「集合の区切り取り」の必要性は生じず、これが充足されなくても、文の容認度を下げることはない。よって des N/ du N 主語がこれらの述語と組み合わせられても、反例とはならない。
- 7) ここでは個体特定の必要性は不要なため、不定名詞句の意味と矛盾しないという意味である。

参考文献

- Anscombe, J.-C. (2001) "Les N/Des N en position sujet ou objet dans les phrases génériques - un syntagme générique ou pas?" in X. Blanco et al. (eds) *Détermination et formalisation*, J. Benjamins. 29-49.
- Bosveld-de Smet, L. (1994) "Indéfinis, quantificateurs généralisés, lecture existentielle et lecture non-existentielle" *Faits de langue* 4, 129-138.
- Bosveld-de Smet, L. (1997) *On Mass and Plural Quantification: the Case of French des/du-NPs*, Groningen U P.
- Bosveld-de Smet, L. (2000) "Les syntagmes nominaux en des et du: couple curieux parmi les indéfinis", in L. Bosveld-de Smet et al. (eds) *De l'indétermination à la qualification: les indéfinis*, Artois P U. 17-116.
- Bosveld-de Smet, L. (2001) "Le pluriel et le massif: une paire unique", in G. Kleiber et al. (eds) *Typologie des groupes nominaux*, P. U. de Rennes. 27-45.
- Carlier, A. (2001) "La résistance des articles du et des à l'interprétation gégnérique", in D. Amiot et al. (eds) *Le syntagme nominal: syntaxe et sémantique*, Artois P U. 65-87.
- Carlson, G. N. (1977) *Reference to Kinds in English*. Ph.D. thesis, U. of Massachusetts.
- Corblin, F. (1987) *Indéfini, défini et démonstratif*. Droz.
- Corblin, F. (1989) "Spécifique-générique: un modèle pour les indéfinis", *Modèles linguistiques*, 11(2), 11-35.
- Dobrovie-Sorin, C. (1997) "Classes de prédicats, distribution des indéfinis et la distinction thétiq-ue-catégorique", *Le gré des langues* 12, 58-97.
- Dowty, D. (1991) "Thematic proto-roles and argument selection", *Language* 67 (3), 547-619.

- Galmiche, M. (1986) "Notes sur les noms de masse et le partitif", *Langue française* 72, 40-53.
- Kleiber, G. (1981) "Relatives spécifiantes et relatives non spécifiantes", *Le français moderne* 49(3), 216-233.
- Kleiber, G. (2001) "Déterminants indéfinis ou quand les *faibles* jouent aux *forts*", in X. Blanco et al. (eds) *Détermination et formalisation*, J. Benjamins 195-217.
- Verkuyl, H.J. (1972) *On the Compositional Nature of the Aspects*, Kluwer.
- 東郷雄二(1995) 「指示と照応_照応的代名詞 IL と CE の用法を中心に」『フランス語とはどういう言語か』(駿河台出版社), pp.75-94.
- 東郷雄二 (2001) 「不定名詞句と総称」 日本フランス語学会 第195回例会発表.
- 東郷雄二 (2002) 「フランス語の不定名詞句と総称解釈」『総合人間学部紀要』(京都大学) 第9号, pp.1-18.